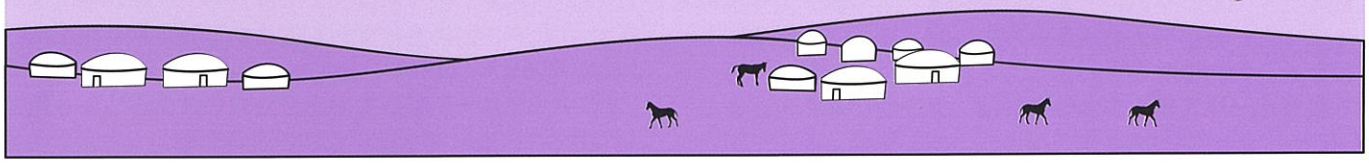
NPO法人子どもセンター「パオ」ニュースレター　発行：子どもセンター「パオ」事務局　発行日：2009年10月31日

NPO法人 子どもセンター パオ

NewsLetter

vol.12

シェルター「丘のいえ」だより⑨ ●
「丘のいえ」の次の場所へ ●
私が出会った子どもたち④ ●



パオの現在

シェルター「丘のいえ」だより ⑨

悩める食卓

私が生活支援員として丘のいえで子どもたちと生活を共にするようになり１年が過ぎました。最近では２人の子どもを相手にすることが多いので日々奮闘する毎日を送っています。

彼女たちは、丘のいえに来たばかりの１週間程は積極的にお菓子作りや手芸などのプログラムに参加するのですが、ここでの生活やスタッフに慣れ始めてくると朝が起きられなくなります。「暇だあ」と言い、日中ゴロゴロ過ごし、夜は遅くまでＴＶを見る生活が続き、生活習慣を乱してしまう子。食事のメニューが気に入らず不機嫌になる子や文句を言う子もいます。

以前は献立表を取り入れていなかったため、毎日の様に「今日は何食べたい？」と確認していたのですが、日が経つにつれて「何でもいい」という返事に変わります。

でもスタッフが決めた献立には「嫌」とはっきり断ったり、手をつけず文句をつけたりするなど痛々しい食卓が続いたこともありました。最近は献立表を取り入れたので以前のように頭を抱えることはなくなりましたが、好き嫌いや食べたいものでは頭を悩ませる日々が続いています。私自身は献立よりも調理方法に頭を悩ませています。料理にこだわる子の場合には、食材の切り方や焼き方が自分の思っていたものと違っていると「違う！」と指摘というより注意されていると感じるほど強い口調な時も。たったそれだけのことで彼女たちは部屋にこもってしまい、1日を不機嫌に過ごしてしまうこともありました。些細なことがここではとんでもなく大きな問題に発展するんだなあと、彼女たちの抱えているトラウマや傷の深さ、重さを感じました。丘のいえから今後も食事の問題が消え去ることはないでしょう。

彼女たちと奮闘する日々を過ごしていく中での私の喜びは『笑顔』を見せてもらうことです。腹が立つことや泣きたくなる時もありますが、「楽しい」「嬉しい」と彼女たちの口から発せられると自然と温かい気持ちになります。退所時には旅立っていく彼女たちから「ありがとう。楽しかった」「ここに来なきゃ出会えなかったもんね。会えてよかった」という言葉をもらったり、手紙を渡されると「この仕事をしていてよかったなあ」と心から思います。生活支援員として何かしてあげたいと思う、でも、寄り添おうとすればするほど何もできないということを最近になって気付かされました。生活支援員とは一緒に生活を送る中で、どんなことがあってもいつもと変わらない態度で彼女たちと接し、温かい環境を提供する職業なのだと、１年を過ごしてみて自分なりの解釈をすることができました。でもそれが正しいかどうかは分かりませんし、これからも彼女たちと日々奮闘する生活が続いて、再び、生活支援員って何なんだろう？と自問自答する日も訪れると思います。そんな頼りない私がめげることなくスタッフとして活動を続けることができるのは、周りの皆さんの支えがあるからだと思います。生活の中で困ったことや、私１人では抱えきれない問題に直面したとき、丘のいえには直に助言を頂ける体制が整っています。どんな時にでも電話をかければ出てくれるという安心感。普段は１人で対応しなければならない場面にも、時に誰かが一緒にいてくれるという心強さ…。同じ問題を共有し、時には文句を言い合える人がいるということが私を支えてくれます。

たくさんの人たちと出会い、支えられ、普段何の気なしに過ごしている日常を面白おかしく、時には驚くほど変えてしまう彼女たちと生活することができる。私はパオに出会えたことを幸せだと感じており、彼女たちにも幸せだと思える時間を過ごしてほしいと思っています。私にできることは本当に些細なことかもしれませんが、彼女たちと出会えたことを大切にし、一緒に過ごす短い期間の中で、彼女たちに少しでも温かい家庭の雰囲気を感じてもらいたいと思います。（丘のいえスタッフ・I）